ベトナムのチョコレート会社BINON CACAOにおける長期インターンシップ経験について

海外交流

仁部屋　みらい*

Learning Through a Long-Term Internship at BINON CACAO, a Vietnamese Chocolate Company

Key Words: Vietnam, Cacao, Communication

はじめに

人文学研究科外国学専攻博士前期課程2年の仁部屋みらいです。本稿では、ベトナムでの現地企業におけるインターンシップを通して経験したことや学んだこと、そしてインターン先であるBINON CACAOでの活動についてご紹介します。

BINON CACAOと遠藤氏との出会い

私がBINON CACAOに興味を持ったきっかけは、学部生の頃に農業について学び始めたことでした。経済成長と工業化が著しいベトナムにおいても、農業は依然として重要な基盤産業です。農作物について調べる中で、ベトナムは世界的にも高く評価されるカカオの産地であることを知りました。ちょうどその頃、教授から、大阪外国語大学時代の大先輩である遠藤亜矢子氏がベトナムでBINON CACAOというチョコレートブランドを立ち上げ、経営していることを伺いました。「ぜひ一度お話を伺いたい」という思いから、教授にご紹介いただき、遠藤氏と連絡を取るようになりました。これが、私と遠藤氏との最初の出会いでした。

大学4年次の夏には、遠藤氏のご厚意により、BINON CACAOおよび自社農園であるBINON CACAO PARKにおいて、2週間のフィールドワークとインタビュー調査を実施する機会をいただきました。調査を進める中で最も印象に残ったのは、遠藤氏がベトナム語を使いこなしながら現地のベトナム人社員と柔軟にコミュニケーションを取る姿でした。その様子を目の当たりにし、外国語を話せることだけが異文化間コミュニケーションではなく、相手の文化や価値観を理解し、それぞれに柔軟に対応しながら信頼関係を築いていくことこそが重要なのだと実感しました。

この経験をきっかけに、私は修士課程において、日本人とベトナム人のコミュニケーションに生じる摩擦と、それを乗り越えるために必要な異文化間コミュニケーション能力について研究したいと考えるようになりました。特に、遠藤氏がどのようなコミュニケーション能力やストラテジーを用いて現地スタッフとの信頼関係を築いているのかを明らかにしたいと考え、2025年4月から12月末までの約9か月間、BINON CACAOでインターンシップ生として活動しながら、現地で調査を進めることとなりました。

BINON CACAOについて

BINON CACAOは、2019年に遠藤亜矢子氏を含む日本人およびベトナム人の投資家によって設立されたチョコレートブランドです。ベトナム・ホーチミン市に事務所とショップ兼カフェを構え、バリア・ブンタウ省チャウドゥック地区には、チョコレート工場と自社農園「BINON CACAO PARK」を有しています。

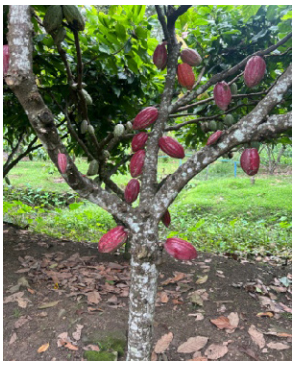
BINON CACAOは、カカオの栽培からチョコレートの製造・販売までを一貫して行う「Farm to Bar」を実践しており、自社農園でカカオを栽培するだけでなく、契約農家からもカカオを買い取り、高品質なチョコレートづくりに取り組んでいます。

ベトナムでは、フランス統治時代にカカオが持ち込まれ、その後、政府主導で栽培が奨励された時期

* Miraii NIBUYA
2001年5月生まれ
大阪大学 外国語学部 ベトナム語専攻 (2020)
現在、大阪大学 人文学研究科 外国学専攻 博士前期課程
TEL：072-671-2500
E-mail: nibunibu301@gmail.com

もありました。しかし、カカオは安定して収穫できるまでに長い年月を要し、栽培管理も容易ではありません。そのため、より収益性の高い果樹へ転作する農家が増え、現在ではカカオ栽培を続ける農家は限られています。また、小規模農家の多くは中間業者を介して販売しているため、高品質なカカオであっても、その価値が十分に価格へ反映されないという課題があります。

こうした課題に対し、BINON CACAOは、高品質なカカオに適正な価値を付け、生産者へ利益を還元することを目指しています。ブランド名の「BINON」は、美しさの「美」と、ベトナム語で「農」を意味する「Nông」に由来しています。その名には、「美しい農業を未来へつなぎ、カカオを通して生産者・消費者・地域社会など、関わるすべての人が幸せになれる循環をつくりたい」という思いが込められています。



自社農園で育つカカオの木。
（2025 年、筆者撮影）

インターンシップの概要

私は2025年4月から12月末までの約9か月間、BINON CACAOでインターンシップ生として活動しました。マーケティングスタッフの一員として広告の企画・制作やオンラインショップの立ち上げに携わるとともに、併設されているショップ兼カフェでは接客業務も担当しました。また、自社農園ではツアーガイドとして農園の案内を行ったり、農作業にも少し携わらせていただきました。

また、社員の一員として遠藤氏のもとで実際に働く一方、調査者として、遠藤氏とベトナム人社員とのコミュニケーションや日々のやり取りを対象とした参与観察およびインタビュー調査も並行して実施しました。社員として組織の一員でありながら研究を進めるという立場だったからこそ、外部からの調査では見えにくい、職場の日常的なコミュニケーションを間近で観察することができました。

ショップ兼カフェの様子とチョコレートドリンク
（2025 年、筆者撮影）

印象に残った出来事

インターンシップ期間中、遠藤氏と社員とのコミュニケーションを観察する中で、特に印象に残った出来事がありました。ある日、カフェを利用されたお客様から「いつもとドリンクの味が違う」というご意見が寄せられました。確認したところ、担当していた社員がレシピを独自の判断で変更し、提供していたことが分かりました。私にとって特に印象的だったのは、遠藤氏の対応でした。日越間コミュニケーションに関する先行研究では、ベトナム人はミスをした際、まず謝罪するよりも、その行動に至った理由や経緯を説明する傾向があることが指摘されています。一方、日本では、まず謝罪の意思を示すことが重視されるため、理由を先に説明することは「言い訳をしている」と受け取られる場合があります。そのため、このようなコミュニケーションスタイルの違いが、日越間の摩擦につながることも少なくありません。しかし、遠藤氏は担当者の説明を途中で遮ることなく、最後まで耳を傾けていました。

遠藤氏が注意していたのは、レシピを変更したことそのものではなく、相談なく変更したことでした。品質を維持するためには、個人の判断で変更するのではなく、チーム内で共有しながら進めることが重要であるという考えを伝えていました。

一方で、担当者の「より良いものを提供したい」という思いまで否定することはありませんでした。担当者の言い分を聞いた上で、「改善案があるのであれば、まずは相談してほしい」と伝え、その場で私

を含むスタッフ数名による試飲会を開きました。担当者が考案したレシピも試飲の対象とし、全員で意見を出し合った結果、最終的には従来のレシピに戻すこととなりました。

この出来事を通して、私は、外国語を話せることと、外国語で効果的なコミュニケーションを図ることとは、本質的に異なるものだと改めて実感しました。同じ言語を共有していることだけで、円滑なコミュニケーションが成立するわけではありません。その言語が用いられる文化の中で、どのような価値観が重視され、発言や行動がどのような社会的意味を持つのかを理解しようと努める姿勢が不可欠であると学びました。

遠藤氏の対応を間近で観察したことで、異文化間コミュニケーションにおいては、相手の言葉だけではなく、その背景や意図にも耳を傾け、自らの価値観だけで判断しない柔軟な姿勢が重要であることを学びました。この経験は、私自身の研究テーマである日越間コミュニケーションを考える上でも、大きな学びとなりました。

おわりに

約9か月間にわたるベトナムの現地企業でのインターンシップを通して、私は「外国語を学ぶこと」、「外国語で学ぶこと」、そしてその先にある「外国語を使って働くこと」を身をもって体験しました。ベトナム語を用いて社員やお客様とコミュニケーションを取り、一人の社員として業務に携わった時間は、大学での学びを社会の中で実践する、最も実践的で貴重な経験となりました。

また、この経験を振り返る中で、改めてベトナム語専攻で培われてきた「先輩・後輩のつながり」の大切さを実感しました。何十年も年次の離れた後輩である私からの突然の連絡にもかかわらず、快く受け入れ、インターンシップという貴重な機会を与えてくださった遠藤氏とのご縁があったからこそ、この経験は実現しました。

ベトナム語専攻の学生は入学当初から先生方に「積極的に先輩方と関わりなさい」と教えられます。当時新入生だった私は、正直そのような文化を少し窮屈に感じました。しかし、そのとき先生から言われた「ベトナムへ行くための予行練習だと思いなさい」という言葉の意味を、この9か月間で痛いほど実感しました。ベトナムでは、人と人との関係性が仕事や日常生活の基盤となる場面が数多くあります。今回のインターンシップも、先輩である遠藤氏とのつながりがあったからこそ実現したものであり、人と人とのつながりを大切にすることの重要性を改めて実感しました。

そしてもう一つ、この経験を通して私が学んだことは、「言葉には温度を乗せる必要がある」ということです。これはあくまで私自身の実感ですが、ベトナム語は特に、言葉の温度に敏感な言語だと感じています。この9か月間、私は初めて、自分が発する言葉の温度を意識するようになりました。相手に伝えたいという思い、うまく伝わらない悔しさ、相手をもっと知りたいという好奇心、そして相手を思いやる気持ち。そうした感情を乗せた言葉は決して完璧ではありませんでしたが、確かな温度を言葉に込めました。だからこそ人との信頼関係を少しずつ築くことができたのではないかと感じています。これからも言葉を学ぶ者として、温度のある言葉を届けられる人でありたいと思います。

また、今回のインターンシップ期間中には、現地で工学部の藤山先生とお会いする機会にも恵まれました。BINON CACAOでの活動についてお話ししたことをきっかけに、先生の研究室との交流が生まれ、実際に学生の皆さんがBINON CACAOを訪問されることにもつながりました。自分の経験が新たな交流の小さなきっかけとなったことは、私にとって大変うれしい出来事でした。このような学部や専門分野を越えた交流が、新たな学びや出会いを生み出していくことを願っています。

豆の焙煎作業の様子とカカオの苗木
（2025 年、筆者撮影）

最後に、本稿を執筆する機会をくださった藤山先生をはじめ、インターンシップを受け入れてくださった遠藤亜矢子氏とBINON CACAOの皆様、そして日頃よりご指導くださる先生方に、心より感謝申し上げます。